

大分大学教育学部における学部と附属学校園の共同研究推進の取組

川寄 道広

1. はじめに

大分大学教育学部附属学校園は、大分市中心部の王子キャンパスに立地している。附属教育実践総合センターも含めて、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の4つの附属学校園が同じ敷地内に立地しているのは全国でも珍しい。そのために、附属四校園の連携は良好であり、教育実習やその事前事後指導における実践センターとの連携協力についても問題なく実施できている。しかし、教育学部のある旦野原キャンパスとは7Kmほど離れているために、その物理的な距離が、そのまま学部と附属学校園の連携協力の妨げにならないようにするために様々な工夫が必要である。

2. 人材バンク

学部と附属学校園の連携を深めるために、第1期中期目標・中期計画期間における附属関係の目標の1つとして「人材バンク」の構築が掲げられた。当時の学部には教員免許を卒業要件としない課程もあったことから、学部教員の約6割が登録を完了したことで目標を達成することができた。その後、毎年、人材バンクのデータを更新し続け、現在では附属教員も人材バンクに登録するようになった。

人材バンクは、学部教員の専門領域や研究情報、協力可能な教科・分野(内容)、附属学校園の教員の校務や専門領域等の情報を集めた、学部独自の総合的なデータベースである。附属教員が大学教員に連携を依頼する場合、人材バンクのデータを参考にして、大学教員に直接連絡し、協力を依頼する。大学教員が附属教員に連携を依頼する場合も附属教員に直接連絡する。附属教員が、どの大学教員に依頼すべきか不明な場合は、依頼したい連携協力の内容を実践センターに伝え、センター教員が大学教員を紹介する。いずれの連携研究においても、研究終了後、実践センターへの報告書提出が義務づけられている。

人材バンクのおかげで、学部と附属の連携体制が制度的に構築され、研究協力が推進されることになった。いつでも手に届くところに必要な情報があり、その情報を有効に活用する手段が確立していることのよさを実感しているところである。

3. 短期プロジェクト

学部教員が附属学校園を活用した研究を推進するために、学部長裁量経費を用いた「教育学部・教職大学院短期プロジェクト」が、毎年募集され、単年度で研究成果が報告されている。短期プロジェクトの3つの分野の1つに、附属学校園との連携を意図した「附属学校園や公立・私立の学校現場との研究教育連携プログラム」が設定されている。

過去5年間の附属学校園関係の短期プロジェクトの数は、4件、10件、9件、13件、13件と着実に伸びている。最近の研究課題には、各校園の保育や教科指導・評価を改善するための研究や、国の教育課題に即した研究、理論に基づく実践的・実証的研究、教育実習等のアンケート結果を学部教員と協

働で分析する研究等がみられる。もちろん単年度の研究もあるが、毎年の積み重ねで成果を向上させている継続的な研究が多い。

4. 共同教育研究推進委員会

平成 27 年度より、学部と附属学校園の連携に関わる事項を検討する「学部・附属学校園連携委員会」のもとに「共同教育研究推進委員会」が設置されている。連携統括長が主催するこの委員会では、共同研究推進のための方策が検討されている。公開研に向けての指導助言、日々の校内研究への関与、実習指導及び実習成果を上げるための支援等の、附属学校園から学部教員への要望については、教授会で依頼し、人材バンクや各種委員会を通して実現を図っている。また、四校園共通の研究テーマ「グローバル人材育成」には、連携プロジェクト経費が予算化され、毎年、研究成果の報告が課せられている。

5. 新任教員の附属 FD

教員養成学部である以上、学部教員には教育現場である附属学校園を有効に活用していただきたいし、附属学校園に力を貸していただきたい。そこで、まずは附属を知ることから始めるために、毎年、新任教員 FD の一環として、附属学校園での研修(附属 FD)が実施されている。研究担当副学部長が 2 日間の日程で計画し、各校園の説明、保育や授業の参観を行い、最終日には、実践センターに学部長、連携統括長、センター長、四校園長が同席して研修のまとめを行う。新任教員が自身の研究の一端を発表すると、校園長が校内研究の指導助言を依頼する場面も見られる。附属 FD は、学部の教員研修ではあるが、附属学校園の側もその研究者を知る機会となり、双方にとって有益な取組となっている。

6. おわりに

毎年、年度末に、1 年間の附属とのかかわりの状況を調査している。附属との共同教育研究の事例を集約してみると、実習への関与は多いが、研究への関与は限られた教員のみが精力的に行っている状況である。また、附属での実習や研究の成果を、学部の授業や自身の研究に還元した事例を集約すると、毎年徐々に件数は増加しているが、やはり、十分に還元されていない状況である。学部・附属の共同研究をさらに進展させるためには、学部教員が「附属のために」という意識を持つことが大切である。例えば、毎週のように幼稚園を訪れ、保育や園内研究に関わっている教員の事例や、30 年以上も毎月 2 時間程度の研究会を小学校算数科および中学校数学科と別個に開催している教員の事例など、長く深く共同研究が根付いている事例もある。キャンパス間の物理的距離を理由とすることなく、学部と附属学校園の連携協力が、共同研究の形で一層活性化する姿を求めて、今後も様々な取組を工夫していくことになる。

(大分大学教育学部附属学校園連携統括長)